



由良郷土誌

昭和34年

矢田梧郎 執筆・編集

由良地区公民館預り

由良郷土誌

由良地区公民館長 千坂幸雄

No.173

公民館だより

令和3年11月

宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

矢田梧郎氏は新宮涼庭顕彰碑の建立（昭和37年）に尽力された人物で当時は由良脇に住んでおられました。彼は由良の地を愛し、この由良郷土誌を編集されました。編集するにあたっては多くの方から聞き取りをしたり、資料を調べたり、由良の地を歩きながら動植物を調べたりしています。

B5版の原稿用紙千ページ以上の大作です。この手書きの文を北野薫氏がワープロで活字にしましたものを由良地区公民館のハードディスクに収めてあります。（平成26年浄書）項目だけになりますが紹介いたします。

- 第1章 その歴史と自然
- 第1節 由良の庄
- 1 凡海郷由良の庄
- 2 国名の起源と領主
- 3 由良6区の歩み
- 4 由良の人口・戸数
- 5 昭和30年調査由良村勢
- 6 風土と気候
- 7 丹後不二

- 8 河川
- 9 動物
- 10 由良の植物
- 11 天変地変
- 第2章 村の経済
- 第1節 農林水産業
- 1 農業
- 2 漁業関係の諸事業
- 第2節 工業
- 1 上代の部
- 2 由良に起こった工業
- 3 由良の製塩
- 4 由良の石材工業
- 5 由良川の砂利及び砂と機帆船業
- 6 由良の銘醸白嶺と由良の戸
- 第3節 商業
- 1 上代の物品市
- 2 大正7年の物価表
- 第4節 由良の方言
- 第5節 農民への規制
- 第6節 むかしのうた
- 第7節 その他
- 第3章 由良の生活・風土
- 第4章 文化の種々相
- 第5章 新宮涼庭補遺集

行事報告

主事 山下まさ代

幾度も緊急事態宣言が発令されるコロナ禍で、今年度も予定していた行事が実施できていません。

2年ぶりの地区運動会も体育部会と公民館運営審議会をもつて中止とさせていただきます。体育部会では、コロナ対策として実施しても完全に安心安全ということにはならないだろう。「運動会」という形にこだわらず、由良地域住民が参加しやすく、楽しめるものと考えてはどうか。また、幅広く地域住民の方たちの声を聞くことも必要ではないか。等々たくさん意見が出ました。そこで、公民館事業に関するアンケートをお願いする事にしました。由良地区の方々と地域が元気になるような事業の検討を進めていきたいと思っています。

【中止となった事業】

- 5月 グラウンドゴルフ大会
- 5月 北前船ウォーキング
- 8月 四部対抗ソフトボール大会
- 9月 グラウンド除草作業
- 9月 由良地区運動会
- 11月 由良地区文化祭

避難訓練 実施

7月13日(火)に、一階調理実習室から火災発生という想定で、初期消火、館内周知、避難誘導、消防署への通報訓練を行



職員の方お二人に施設設備の点検もお世話になりました

いました。子育てナースリーの皆さまにお世話になり、森田さん、館長、主事3人で実施しました。消防署員の方から講評をいただき、その後消火器を使っ



消火訓練スタート！

はまの子グラウンド 除草作業

9月5日に予定していたグラウンド除草作業は緊急事態宣言発令に伴い19日に延期。しかし、緊急事態宣言が延長され今年度は実施を見送りました。

8月30日、はまの子グラウンドで活動されているターゲッ

に、10月2日、自治連の方に除草作業をしていただきました。また、遊具の所を刈っていただいた地域の方もあり、きれいになりました。ありがとうございます。



8月30日の除草作業風景

ふるさとを誇り地域に貢献できる

子供の育成

栗田小学校長 田 中 晴 彦

由良地区の皆様には、平素より本校の教育活動並びに子ども達の健全育成や交通安全等において、多大なるご理解とご協力をいただいております。さて、今回、本校の「ふるさとみやづ学」について、五年生の取組を中心にかけていただきます。

栗田学院がめざす子ども像の一つに「ふるさとを誇り地域に貢献できる子ども」を掲げており、小・中九年間の生活科、総合的な学習の時間に行う、地域を題材とした学習「ふるさとみやづ学」を重要な柱に位置付けています。一、二年生は町探検、三年生は福祉、四年生は環境、五年生は産業、六年生は歴史と学習を積み上げ、中学三年生で

は総まとめとして「まちづくりの提言」を行います。

令和元年度の五年生は、ふるさとの海の幸、海で働く方々の生き方に焦点を当てた学習を行い、ふるさとの海の豊かさや美しさ、地元漁師の話から漁の工夫や苦勞を学び取りました。近隣の水産関連施設では、つくり育てる漁業について、サザエの稚貝に触れて学んだり、環境調査船平安丸の見学で海の環境パトロールについて学んだりしました。このようなふるさとの海についての調査活動を通し、ふるさとの素晴らしい海、海の恵み、海で働く方への感謝の思いや我がまちへの誇りをもちました。ふるさとのために役立ちたいと考える児童もいました。

令和二年度の五年生は、ふるさとの産物を使った特産品開発を行いました。海洋高校では海産物の加工や新商品を考案するポイントを学び、商工観光課の方から、商品は味や見た目だけでなく、形が崩れず生ものでないことなども大切だと学びました。そうした学びを生かし、児童は新しいふるさとの特産品を考え、改良を加えていきました。コロナ禍で調理実習はできませんでしたが、商工観光課の協力を得て教室と調理専門学校をリモートでつなぎ、児童考案の品をプロに試作していただきました。自分たちのアイデアが実際の形になり大興奮の児童達でした。さらに、レシピを地元事業者へ発表し商品化実現のチャンスを得ました。商品化を目指し発表練習を重ね、当日には「これがふるさとの自慢の食材を使った商品です。」と堂々と事業者へ発表しました。由良のオリブを使った井など、五品中三

品の販売が決まり、満足感・達成感であふれていました。

令和二年度から学校運営協議会が本格導入となりました。「ふるさとみやづ学」の充実には学校運営協議会や地域コーディネーターとの効果的な連携が必要不可欠です。ふるさとの学習を通して、地域で育っている実感や地域の一員としての自覚が育まれることによって、児童はふるさとへの誇りをより強くすると考えています。さらには、他の地域の学校とつながり、ふるさとの学びを伝え合うことで、それぞれの地域の特色や違いを知り、我がふるさとの素晴らしさに改めて気付くだろうと考えています。その意味で、今年度は、昔から由良地区同士の交流があるという山形県鶴岡市の豊浦小学校とリモートでつながって、六年生が北前船について学んだことをもとに、交流する計画です。非常に楽しみです。

脇の金毘羅さん

飯澤 登志朗

七曲り八峠から分かれて小高所に金毘羅さんが祀られている。

この神社は本社造営棟札によると、文久2年(1862)由良村の由良山金毘羅大権現と名乗り、造営の大檀那を田辺舞鶴城主牧野豊前守誠成、勧進の大願主を由良山如意寺阿闍梨として「御領主君武運長久」「村内安泰」とともに「船内幸福」が祈願されている。

神社は、はじめ奈具海岸の桃島に祀られていた。しかし時化により度々社殿が損壊したため現在地に移して再興されたといわれている。

神社には、多くの船絵馬が奉納されているが、奉納者は由良

に限らず宮津・加悦・岩滝等各地から奉納され「海上安全」を強く祈願したことが伺える。

鳥居には、「海上安全」と奉納者名が刻まれ、石垣には「元結屋(三上家)」の名を見ることが出来る。

由良湊は、江戸時代から北前船の寄港地として栄え、船乗りを生業としていたので船頭や水主を多く輩出していたし、「板子一枚・下は地獄」と言われる船旅の安全を祈る気持ちの表れである。

また境内からは、素晴らしい眺望で由良全景を観ることが出来る。境内入口には常夜灯があり昭和40年頃まで宮守により毎夜種油や蠟燭で明かりが燈さ

れていた。

昭和の中頃まで、神社の格子戸に毛髪が元結で括り付けられていた。これは航海の安全や無事帰港を祈り船頭や家族が自らの毛髪を切り奉納したものであるが、神社屋根の修復の際、撤去され現在は見ることは出来ない。

過去には由良川に多くの機帆船が繋がれ、由良の繁栄にも影響があつたが、天気予報は現在のように正確ではなく永年の経験や勘に頼ることがあり、出航した後天候が荒れてくると家族や親戚が神社に籠もり無事帰港を祈願していた。

ちなみに、「こんな小さなお社に殿様が檀那を」と思うところがある。牧野誠成(たかしげ)は第9代城主であり、やはり如意寺と牧野家の深い繋がりが関係していると考えられる。

第4代牧野明成は信仰心が強

く、当時宝珠院長福寺と号していた如意寺を度々訪れていた。子供に幼名「長福」として代わりに田邊藩城主から「如意」の寺号を賜り現在に至っている。岩穴稲荷神社境内に建つ由良の戸碑は第8代牧野節成が建立したものであり他にも牧野家に関係するものは由良地区に多い。

子供の頃から慣れ親しんだ金毘羅さん、海の安全は誰もが願う事であり、これからも金毘羅さんを大事に守っていききたい。



世界初！無人消火する建材

枡 本 清

私は今年の5、6月頃、テレビを見ていたところ、世界初、自ら初期消火する革新的建材が発明誕生したというニュースがありました。人が消火する前に初期消火をするそうです。ガソリン火災の防火訓練を実施する建材「スモークパネル」は急速な燃焼を断ち切り、素早く消火するカリウムを主成分とした薄くて軽いシート状の建材で、300℃を超えると自動的に白い煙状の消火薬剤が放出され、無人でスピーディーに消火されました。放送された場面は下記の実験の様子と全く一緒でした。しかも、この白い煙は人が吸っても無害だというアナウンサーの説明でした。



このガソリンの消火実験の後、続いてローソクの火を、手の平位のシート状の白い消火建材に近づけると、やはり白い煙がローソクの火を消火しました。京都へ嫁いだ長女の息子（カメラマン）に、私が見た通りを話し、スマホで探してほしいと頼みました。先日、資料を持ってきてくれました。

このような初期消火材が日本や世界中に普及されるよう願うものです。

参考になれば幸いです。

開発業者のニュースリリースより抜粋

実験の様子



引火直後



約15秒後消火

——— 活用イメージ ———

例：●公共性の高い場所

オフィスビル、病院、学校、保育園、駅などの施設
新幹線、バス、飛行機などの公共交通機関など
エレベーターなどの狭い空間

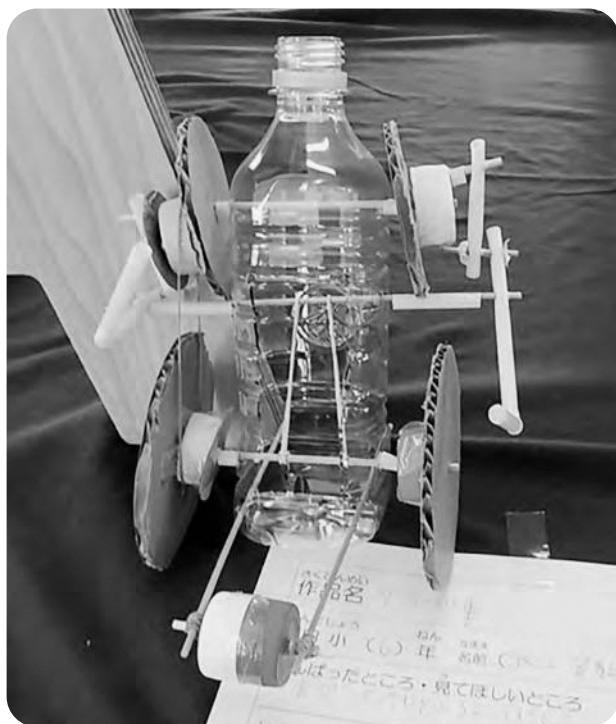
●スプリンクラーの設置できない場所

美術館、歴史的建造物、文化財など

子どもたちの作品

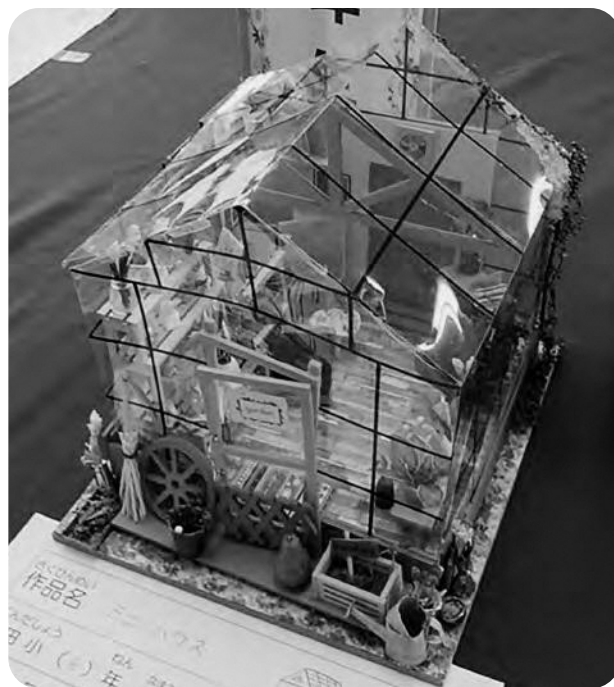
栗田小学校に通う4年生以上の由良地区の子ども達7人の作品を紹介します。
コロナ禍の夏休みにがんばって制作しました。

6年 小林 蓮さん



6年 浪江 翼駆さん

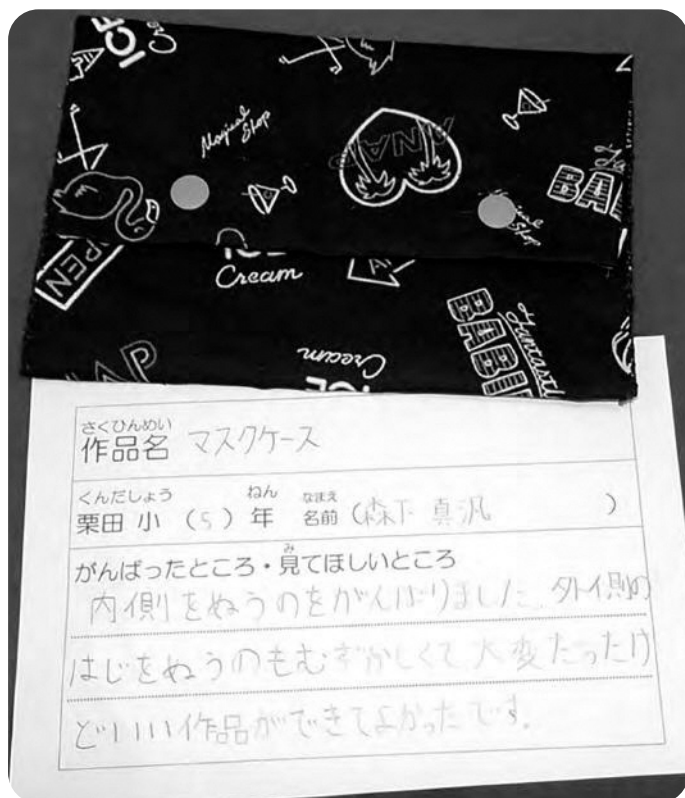
6年 松本 結瑞さん



6年 松林 慧志朗さん



5年 山本 真凜さん



5年 森下 真凜さん

五年
自然の美
山本
真凜

感想
ぼくは、ほかくぎを作
てうらやめただけで
こんなにくさん入て
くれるとは思いません
でした。
つかまえてみて、こんなに頼
がたいとは思って、もいなかた
のでビックリしました。
ですが、きけんなので、今回は
飛びはじめ、実がつかま
えられ、ちしてたれも、これ
ないようにならうとしたいです。

4年 森 篤都さん
スズメバチのことを
がんばってしらべて
かきました

スズメバチ

ほかくの記ろく



きっかけは、そ父母の庭のブドウの
木にいろいろな虫が来ていて、その
中でもスズメバチが、多かったです。
母がほかくぎを作っていました。
その材料をいろいろ試して、みたい
と思いました。

みんな知っていると思いますが、人を
おそろしくする虫なので、たぶん
大人に協力してもらいました。

ハチの苦手な物ベスト3
その1 雨を苦手とするワケ
ハチは、水が苦手です。水が苦手な
ハチは、雨を苦手とするワケです。
たぶん、水が苦手なハチは、雨を
苦手とするワケです。

その2 ハチの活動に気温は、る度前後
弱いです。気温は、る度前後
弱いです。気温は、る度前後
弱いです。

その3 夜間に弱い
昼間に飛ぶハチです。夜は、お
ろしく、飛ぶハチです。夜は、お
ろしく、飛ぶハチです。

次のページには
ハチの写真が
たくさん出ます
苦手な人は見るを
やめて
おきましょう

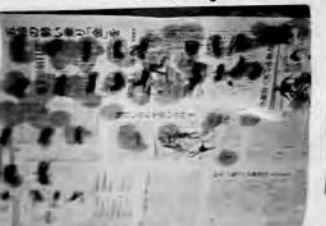
注意!!

ハチトラップの仕組

ぼくのレシピ
61匹き↓



弟のレシピ
24匹き↓



3種類のほかく

基本的な材料ー
500mlペットボトル
酒 75ml
酢 25ml
さとう 32g

ハチミツ+す+さとう+
タバコ葉しょう油

ハチミツ+ 日本酒 +
す+さとう+ぶどう

イキに入れたものは
フルーティな香り。ぶどう
ハチミツ+日本酒のお酒
は、水

つるした様子



故郷から得た宝物 『人にやさしく、周りには感謝する』

株式会社カスタネット

代表取締役・社会貢献室長 植木 力

由良に生まれたのは一九五八年（昭和三十三年）。私の家も周りの家も貧乏な時代だったと記憶しています。それでも人と人との繋がり、子どもの声がどの家からも聞こえ、祭り・運動会など地区全体に活気がありました。

わが家には生活に困っている人、借金を抱えた人が集まり、両親はそんな人の相談にのり、食事や風呂の用意をしていました。手伝いをしながら「人を助ける立場ではなく、受けるほうだろう。」と思っていました。両親だけではなく祖父母は、地域を活性化する取り組みを行い、今でこそ丹後は温泉ブームに沸いていますが、そうではな

い六十一年前に祖母は由良温泉の開発を行っていました。今で言えば、女性起業家として注目されていたと思います。

祖父（矢田悟郎）は、郷土史家として、丹後の歴史を調査している間に、幕末の名医である新宮涼庭が由良の出身でありながら郷里の人が殆どその実績を知らないということを知り、由良神社に顕彰碑を建てました。それらの話を聞いた私は、「うちの家には貧乏神がいる。」と母に訴えると微笑みながら母は「人にやさしく、周りに感謝しなさい。」と。

高校卒業後、由良を離れ、航空自衛官、その後、半導体関連企業に就職しました。やりがい

のある仕事を数多く任されて、四十一歳で課長になりましたが、起業したい夢が膨らみました。

ちょうど社内ベンチャー制度ができ、第一号として二〇〇一年社会貢献とともに成長したい想いから起業しました。

赤字の状態でありながら、カンボジアに学校建設、障がい者スポーツ支援を行っていると、周囲からは「ボランティアをする立場ではなく、受けるほう。」と言われ、昔、私が両親に言ったことに気づき、あの貧乏神は、私のそばにいたと思いました。

しかし、世の中はいつしか儲け一辺主義から、企業の社会への影響に対する責任を重視されるようになり、社会貢献に熱心な会社を応援（物品購入）したという考えが広がってきていたのです。

あの未曾有の東日本大震災から、地域の社会的課題をビジネスとして解決するソーシャルビ

ジネス（SB）が注目され、その先進事例企業として日本中から当社が注目されています。

そのSBのアドバイザーとして、京都府下はもとより、全国の地域活動を見てきました。ある時、成功事例を由良で行えば、少しでも課題解決に繋がるのではないか。そして、活気があった村を取り戻せるのではないかと思いました。

七月には、リゾートオフィスを実家の跡地に建て、都市部企業と地域の企業が交流する場、地域の交流拠点として開設準備を進めています。

社会貢献と事業が両立する姿を追いつけるのは、両親から受け継いだ「人にやさしく、周りには感謝する」は故郷から得た宝物です。



由良が光り輝いていた時代（16）

由良の歴史をさぐる会 加藤 正 一

「課題①」

「奉納船絵馬について」

由良の金毘羅神社、照国稻荷、玉司稻荷神社に江戸時代（十九点）、明治時代（二十一点）（不明五点）、船頭、並びに乗組員により奉納された船絵馬。京都府一の数量を誇る絵馬（四十五点?）（後述）（板図を含む）があった。船絵馬は神社がある自治会に属しているが、現在京都府丹後郷土資料館、宮津市教育委員会に寄託されている。金毘羅神社に二十五点（二十三?）、照国稻荷神社十点、玉司稻荷神社十点。次表の船絵馬一覧は、後述する「丹後由良の船絵馬一覧表」と「宮津市歴史資料館二〇〇五年春期企画展」（平成一七年二月）「海の折りー船絵馬と北前船」資料による。この海の折り資料には誤記がある。それは由

良北前船資料館に展示されている。

難船絵馬寶求丸（明治一七年九月）が、元結屋徳兵衛になってしかも帆数、石数が残されている資料と合わない。本来小林善次郎手船・船長加藤長助である（二覧表注）金毘羅神社の奉納絵馬数が「宮津市歴史資料館二〇〇五年春期企画展」（平成一七年二月）二五艘（現存する絵馬点数二三点）に対して研究者、真下氏、柚木氏の資料は異なる。

真下氏著

「北前船主考」二九点、新福寿丸、幸丸、飛龍丸、欠落。代わりに自在丸、益宝丸、順風丸、宝寿丸、栄求丸が付加されている。これらの中には照国、玉司稻荷神社に奉納されたものが混同されている？

船絵馬

船名	所属	帆数	石数	奉納者	奉納年	西暦年
中伊勢丸	岩滝	22反	700石	山家屋市蔵	元治2年	1865
新福寿丸	由良	—	—	定助	慶應元年5月	1865
幸来丸	岩滝	19反	500石	山家屋文四郎	慶應2年7月	1866
順宝丸	岩滝	25反	1100石	山家屋文助	慶應3年5月	1867
橋立丸	由良	20反	600石	市太郎（良）	慶應2年5月	1866
中伊勢丸	岩滝	22反	700石	利七郎	慶應3年	1867
稻荷丸	由良	23反	800石	利七郎・亀吉	慶應4年	1868
八万丸	由良	16反	300石	利七郎・亀吉	慶應4年	1868
幸来丸	岩滝	22反	700石	山家屋平五郎	明治2年9月	1869
幸丸	—	19反	500石	山家屋平五郎	—	
栄福丸	由良	22反	700石	米屋吉兵衛	文久3年2月	1863
磯部丸	由良	23反	800石	米屋九郎衛門	文久3年8月	1863
松尾丸	由良	12反	150石	米屋善右衛門	慶應元年5月	1865
磯部丸	由良	22反	700石	—	慶應2年4月	1866
永徳丸	由良	—	—	磯田平兵衛	慶應3年3月	1867
乗雲丸	岩滝	21反	650石	糸井文四郎	明治11年	1878
飛龍丸	岩滝	21反	650石	糸井文四郎	明治12年4月	1879

飛龍丸	岩滝	21反	650石	糸井文四郎	明治14年8月	1881
幸福丸	岩滝	22反	700石	糸井又造	明治17年2月	1884
宝昌丸	宮津	24反	1000石	元結屋清助	明治6年2月	1873
宝永丸	宮津	23反	800石	三上勘兵衛	明治12年4月	1879
宝永丸	宮津	21反	650石	元結屋徳兵衛	明治17年9月	注
鳴鳩丸	由良	18反	400石	山鹿屋市蔵	明治7年11月	1874
帯陽丸	由良	21反	650石	(下村)市三郎	明治7年11月	1874
善樹丸	岩滝	19反	500石	山家屋向井利喜蔵	明治元年11月	1867
高王丸	由良	18反	400石	米屋万蔵	安政3年3月	1856
宝恵丸	宮津	21反	650石	元結屋徳兵衛	万延2年3月	
伊勢丸	岩滝	15反	270石	山家屋吉蔵	慶應2年	1866
帯陽丸		21反	650石	市三郎	明治7年	1874
古益宝丸	加悦	19反	500石	下村市三郎	明治8年	1875
蓬萊丸	由良	21反	650石	下村市三郎	明治11年7月	1878
宝寿丸	由良	20反	600石	亦市	明治12年11月	1879
宝寿丸	宮津	20反	600石	(三上)加藤長助	明治25年4月	1892
住「吉丸」	由良	16反	300石	新屋宋□中	—	
住吉丸	由良	16反	300石	河崎屋久兵衛	—	
宝得丸	—	—	—	元結屋六兵衛	元治2年3月	1865
不明	—	—	—	—	元治2年	1865
賀□□	—	—	—	山家屋 □□	明治2年正月	1869
元景丸	舞鶴	—	—	丹後舞鶴善六船中	明治6年1月	1873
「幸福」丸	岩滝	22反	700石	糸井又造	明治12年1月	1879
稲荷丸	由良	22反	700石	糸□□善六?	明治17年	1884
新稲荷丸	岩滝	23反	800石	糸井皆蔵	明治20年	1887
不明	—	—	—	—	□2年正月	
万□□	—	—	—	「千賀」嘉市郎		
宝恵丸	宮津	21反	650石	元結屋徳兵衛	文久3年	1863



(アルバムの写真コピー)
左図の下の絵馬である。

柚木学氏著
「日本海運史の研究」一六六頁。
幸丸、欠落。栄求丸、宝寿丸が
付加されている。
注目すべきことは、両氏の資
料で共通に付加されている難船
絵馬「栄求丸」である。
郷土館に残されていた写真帳
の中にこの絵馬の写真が残され
ていて難船絵馬であることが解
り金毘羅神社に奉納されていた
ことは事実である。しかし現在
どこにも見当たらない。
どこにあるのだろうか？

拡大図



この絵馬の内容は

明治一七年八月

「栄求丸」

帆数一八枚

奉納者 田中庄五郎

あれば由良に残されている三隻目の難船絵馬であり貴重なものである。ご存知の方ご連絡いただきたい。

奉納絵馬には吉本善京、絵馬藤の名前が記載されているものがあるが、これは作者と考えられる。

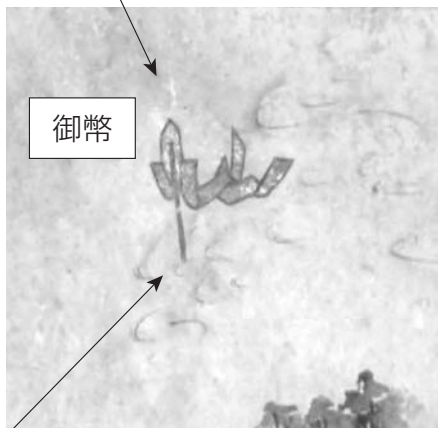
奉納された絵馬は画風、パターン、色彩等が素人目には二点を除き同じに見え大阪で作られたことが考えられる。大阪以外（プロ以外）で作られたと思われる二点は、板に描かれた板図。もう一点は難船絵馬で明らかに色合い、構図が他の絵馬と異なる。

署名押印「飛龍丸」



この絵馬「飛龍丸」。作者は大阪のプロではなく署名、判から船頭糸井文四郎が描いたものである。（糸井とは船主の姓）である。

御幣



乗組員の様子をよく見て欲しい。左図は同じ難船絵馬「寶求丸」であるが、乗組員は全員御幣（神様）に向かって手を合わせて祈っている恰好を取っている。一方「飛龍丸」はそれぞれ作業にいそしんでいる。現実と非現実の違いがでている。

詳細は由良北前船資料館に展示されているのを見て欲しい。船絵馬「飛龍丸」は斬新さもあり、全国的に有名な難船絵馬である。



船絵馬については、由良の北前船資料館を作るにあたり、複

写、写真を作る労を取られた当

時の公民館館長、枝川隆亮氏が

作成された「丹後由良の船絵馬

一覧表」が詳細に作られている。

由良北前船資料館には状態の良

いものが模写及び写真で二十五

点展示されている。

船絵馬を奉納する意味につい

ては両丹地方史書に書かれた由

良の先賢者、松本師正氏の資料

によれば、玉司稻荷神社の絵馬

は五点になっている。一体どう

してそれぞれの研究者によって

違うのか不明である。

また資料の中に船絵馬は北前

船・牧野隆信氏と断り、奉納月

によって出発前の予祝型と帰航

後の感謝型の二つに別けられて

いる。他の研究者にも航海安全

を祈願して、また無事航海を終

えたことを感謝して奉納と記述

したものもあるが、松本氏の分

別の仕方では月別「丹後由良の船

絵馬一覧表」にもとづき分別す

ると、

予祝型（祈願）

正月 四点

二月 三点

三月 四点

四月 四点

五月 四点

残りは不明

感謝型

七月 二点

八月 二点

九月 二点

十一月 四点

が奉納している。大阪に帰港し

た時に発注せず、来年も、また

年明けて航海に出ることが決ま

ってから、船頭及び乗組員が大

阪の船絵馬屋に発注し手に入れ

奉納したように考えられる。

由良にいてまず大阪に依頼書

を出し、料金を送付する、完成

した船絵馬を由良に送ってもら

い受け取るのにどのような仕組

みがあったのだろうか。

参考までに難船絵馬「寶求丸」

船頭加藤長助の「大福万覚帳」

によると難船したのは六月中に

酒田米を積んで小浜までの間に

難船したことが読み取れる。行

方不明の船絵馬「栄求丸」も遭

難船馬が奉納されたのは明治十

七年八月であり、難船絵馬「寶

求丸」の奉納は明治十七年九月

であり同時期に同じ嵐にあった

可能性がある。すると奉納時期

が多少ずれているのは船絵馬を

入手した時期が異なったか。



一と述べたが、実際は「海の祈り」船絵馬と北前船「丹後由良の船絵馬一覧表」では「順寶丸と橋立丸」が「稻荷丸と八万丸」が同一整理番号になって四十三点と書かれている。真下氏の記述では独立した絵馬として記述されているが、宮津市教育委員会に確認してもらった結果、一枚の絵馬に二艘が書かれていることが解った。「順寶丸と橋立丸」は損傷が激しく順寶丸は解るが橋立丸は読み取れない。

「稻荷丸と八万丸」



この絵馬の二艘の帆の状態をよく見てもらうとそれぞれ帆の膨らみが違う書き方がされている。二点の絵馬はどちらも吉本善京の署名が入られている。これらの奉納者は同一の船主の船頭二人と思われる。大阪で落合い打合せ共同発注したものと考えられる。

正しい現存船絵馬数は「四十三点」と

「不明の絵馬一点」である。

短歌

杵本 清

澄める空こよなく晴れて里山は季節は巡り紅葉の秋

秋深し菰の夕日は山の端に羽ばたき強し鴨の一群

暑き日も立秋過ぎれば稲穂の花緑の田の面はうすく色づき

青田風真夏の稲田は緑の波早稲は色づき蝗飛び交う

夏日和暑さに耐えたつわぶきは黄色花びら庭の一群

里山は入る人なく荒れ果てて秋空澄みて紅葉深まる

球磨川は橋脚のみ暴れ濁流続く豪雨の無情のニュース

秋の日時計

藤本史代

緩やかに季節の滑車操りてコスモス畑に白き風立つ
迷いごとひとつ断ちたる身の軽さ秋蝶われのあと先を飛ぶ
つつましくありて愁眉を開かむか秋陽に揺るる野のほととぎす
砂浜に拾いし蒼きシーグラス還らざる日の光しずめて
絵筆持つ手許に夕光届ききてわたしを急かす秋の日時計
渴けるはのみどにあらず心かも身の裡透かす素秋のひかり
裏山に鹿鳴く夕べ深深と身にしのびくる秋冷の闇

令和2年度 宮津市立小学校・中学校人権標語優秀作品

「気づいたら すぐにつみとれ いじめの芽」

中学1年生

「今日もまた いつもの声で 笑顔になる」

中学2年生

「肌の色も生まれた場所も関係ない 大切なのは その人の心」

中学3年生

お知らせ

(1)『由良地区公民館だより』が宮津市ホームページから閲覧できます

昭和39年(1964年)6月に第1号が発行されてから、最新号173号(令和3年11月発行)までが閲覧できます。「由良地区公民館だより」で検索してください。

“公民館活動をより皆さんのものにして、よりよい地区民の発展のために活動状況を連絡する機関誌として発行することにしました。また、この紙面を通じて意見の交換の場や意見発表の場として発展するよう希望します”と第1号には書かれています。

ぜひ、多くの方の原稿をお待ちしています。

(2) 公民館だより第174号(次号)の原稿のお願い

次号はテーマを決めて原稿を募集します。

テーマ「3月」

3月といえば、ひな祭り、卒業、転勤、転居、新たな出発への準備、コブシや梅など3月に咲く花等々、思うことはありませんか。そのことを短い文や絵にしてみましょう。年齢は問いません。詳細は後日連絡します。



編集後記

長く離れた地元に戻り
何を生かせるのか

文化部 山下剛敏

平成二十八年四月から、由良に戻ってきて六年目になります。二十年近く地元を離れていましたが、地域おこし協力隊という制度によって港地区にUターンしました。

その協力隊で何をしたかと言いますと、宮津市で取り組む事になった『オリーブ』でした。この事を通じて、若い頃は話をしたこと無かった世代の方々と沢山関わらせていただける。そんな環境に恵まれました。

地元に戻り改めて地域を見て感じたのは、色々なことが寂しくなっているという事でした。そんな景色を横目に、僅か三年間で覚え、学び・身に付けた事をオリーブ事業の発展と地元の環境維持に少しでも、役立てられないものか…という思いで一念発起し、起業しました。

現状はまだ、オリーブの実を少

量しか収穫できないこともあり、葉を使つての商品化に至っていません。『オイルより数倍もポリフェノール量が多いと言われる葉』で、オリーブの葉を茶葉に加工し、オリーブティーとして販売に至っています。前職の飲食業経験値を十分に活かし、品質管理にあたっています。

そのための畑は、多くの地主さんから協力を得て、巨大な土地をお借りでき感謝しています。地主の皆さんにも応援していただいています。出来る限りですが、良い方向に繋がっていきたいと思い、試行錯誤しながらの日々です。

由良地区を起点に宮津市内で広まったオリーブ事業は、現在五十名を超える生産者により、オリーブ煎餅など多種に渡り開発・販売されています。

オリーブを通して少しでも由良地区が活性化することを願います。由良の皆様には、今後のオリーブ事業に興味、関心を持っていただけたら幸いです。